

2026年1月4日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教66「シオンの娘よ、恐れるな」

ゼカリヤ9：9～10、ヨハネ12：12～19

教会の暦で、受難週が始まる日曜日を「棕櫚の主日」と呼びますが、その由来が今日のところにあります。13節に「なつめやしの枝を持って迎えに出た」とあります。以前の口語訳聖書はこれを「棕櫚」と訳しておりました。新共同訳、聖書協会共同訳では「棕櫚」ではなく「なつめやし」としています。このエルサレム入城の話は四つの福音書がいずれも共通して伝えています、人々がイエスさまを歓迎するときに用いた葉を「なつめやし」としているのはヨハネ福音書だけです。

第10章のところで「神殿奉献記念祭」の話をしました。これは紀元前169年にシリアのアンティオコス・エピファネスという暴君が侵略して来てエルサレムを占拠するという出来事があった。しかし紀元前164年にユダ・マカバイという人がエルサレムを奪還して、偶像の神々を取り除き、まことの神さまを礼拝します。その出来事についてマカバイ記という旧約聖書の続編、外典の中には次のように記されています。「ユダヤ人は、しゅろの枝をふり、歓呼の声をあげ、たて琴やシンバルや他の弦楽器をかなで、賛美の歌をうたいながら要塞に入った。イスラエルから敵が根絶されたからである」（マカバイ上13：51）神の民を苦しめ、異教の神々を持ち込む異邦人の支配から人々を解放するまことの王が来られる。その王の到来を喜び、勝利を祝う行為として「なつめやしの枝」が使われました。ヨハネ福音書が「なつめやし」とするのは、イエスさまがまさにその王であることを意味しています。

イエスさまを迎える人々の叫びもまた王の凱旋、自分たちの王を迎える言葉になっています。「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、お前の王が御出でになる、ろばの子に乗って」（15節）これはゼカリヤ書からの自由な引用ですが、この「恐れるな」という言葉には、人々の中に根深くある支配者に対して抱く恐れが強調されています。これまでイスラエルはアッシリアやバビロニア、そしてローマと強国の支配に翻弄されてきました。そういう王の支配に人々は脅威を感じ、恐れていました。人々を恐れさせ、力で押さえつけ支配する王です。人々の心の中にはそういう王のイメージが植え付けられていました。

この世の王は軍馬にまたがり勇ましく登場するものです。甲冑を身につけ、敵国の捕虜を引き連れて力を見せつけるようにして凱旋してきます。そうやって人々を恐れさせ、支配する。しかしイエスさまはそうではありません。ろばの子に乗って登場される。それは弱々しくみずばらしい格好だったかもしれません。ろばの子に乗るのですからちょっと滑稽な光景だったかもしれません。けれどもそれは奇しくもゼカリヤ書が預言していたとおりにになりました。イエスさまはまさにこの預言のとおりになされました。軍馬が戦いを象徴するとするならば、ろばは平和の象徴です。イエスさまはどこまでも平和の王として凱旋されたのです。

聖書における平和は、両者が和解し、共にいる、共存している状態を意味します。特にヘブライ語では平和、平安を「シャローム」と言いますが、これは挨拶の言葉でもあります。親しみを込めて互いにシャロームと挨拶を交わす。それが平和の関係です。お互いにいがみ合っているなら挨拶もしないでしょう。そしてこの和解は、何より神さまと和解していること、神さまと共にいるということが神さまに造られた人間としてもっとも根源的な平和なので

す。ちょうどあのエデンの園でアダムとエバが何不自由なく平和に暮らしていた、神さまと共にあった状態です。ところが人間は神さまに対して罪を犯しました。神さまとの約束を破ってしまった。だから神さまと共にいることができなくなりました。楽園を追放されたのです。それがシャロームを失った、平和を失ったわたしたちのあらゆる現実を作り出しています。アダムとエバの息子たちはいきなり兄弟殺しをしてしまいます。この世界もそうです。戦争の問題、身近な人間関係の問題は後を絶ちません。そこには平和とは程遠い現実があります。その根には神さまとの関係の破綻、罪があります。全てはそこからやり直さなくてはならない。表面的に、うわべだけ取り繕ってもダメなのです。神さまとの和解、そこが解決しない限り、わたしたちに平和はありません。

そしてこの神さまとの和解を取り付けてくださったのが他でもないイエスさまです。神さまから離れ平和を失っていたわたしたちが、神さまと共にいることができるようにしてくださった。そのためにその根にある罪をイエスさまが取り除いてくださいました。それが十字架による贖いです。本来ならば、わたしたちが自分でこの罪を償わなければならないでしょう。でも、罪の中にあって日々罪を犯し続けるわたしたちが自分で罪を償えるはずありません。日々、神さまの怒りは増していくばかりです。だからこそ罪なきお方であるイエスさまがわたしたちの罪を全て背負って十字架で死んでくださったのです。

ろばが重い荷物を背負って歩くように、イエスさまは、十字架で全人類の罪の重荷を全部引き受けてゴルゴダの丘に向かって歩かれた。そして十字架で死んでくださった。それはわたしたちの後悔してもしきれない罪、神さまに背いた結果背負わなければならない全ての重荷です。それを全部イエスさまが全部引き受け担われたことで、この罪は帳消しにされました。そして三日目によみがえって、神さまと共に生きる命を与えてくださいました。だからこそよみがえりのイエスさまは、弟子たちに現れた時に「あなたがたに平和があるように」と言われたのです（ヨハネ20：19）。

今年の終わりにわたしたちはクリスマスを祝いました。聖書はイエスさまの誕生によってインマヌエル（神さまが共におられる）を宣言します。イエスさまによって神さまと共にある、真の平和が実現したからです。その平和の王としてイエスさまはこの世に来られました。そして十字架とよみがえりの出来事によって真の平和を打ち立ててくださいました。その平和は絶えることがないとイザヤも預言しています（イザヤ9：6）。今日、神さまはわたしたちに言われます。「シオンの娘よ、恐れるな」と。もう恐れることはない。あなたの罪はすべて赦されている。もうあなたは神さまとの和解を果たした。神さまと共に生きる人生を始めている。だから恐れるな。この力強い平和の宣言をもって新しい年を歩み出すことができるのは何という幸いでしょう。

天の父よ。「恐れるな」この御言葉をもって新しい年を始めることができますことを感謝します。イエスさまがわたしたちのために十字架で死なれ、三日目によみがえられて、神さまとの平和を打ち立ててくださいました。神さまと共に生きる人生をはじめています。どんなことがあっても、神さまが共におられることを信じて、恐れを捨てて歩んで行けますように。主の御名によって祈ります。アーメン。